

JCLIF

## 日中労働情報フォーラム

発行責任者 前川 武志 郵便振替 00110-0-154157  
 〒125-0062 東京都葛飾区青戸 3-33-3 野々村ビル 1階  
 電話 03-3604-1294 FAX 03-3697-6459

## 日中労交訪中団報告

2012年7月17日から7月22日



日中労交では、日中国交回復40周年を記念する中華全国総工会の招待を受けて訪中団を組織した。数年前までは日中相互に訪問団を交流派遣してきたが、中国の総工会よりの団を最後に交流が途絶えていたものである。今回は総工会より相互交流の中止の申し入れを受けて、最後の訪中団としての行動である。



日中労働者交流協会・日中国交正常化40年記念訪中団  
 日中労交・副会長（訪中団団長） 垣沼 陽輔

私たち、日中労働者交流協会（略・日中労交）は、日中国交回復40年という記念すべき節目の年に、中華全国総工会の招待で中国を訪問することになりました。心より感謝申し上げます。

さて、私たち日中労交は、80年代に総評が解散し日本の労働者・労働組合が中国との友好・親善を深めることが困難になっていたとき、休眠状態になっていた日中労交の活動を再開し、初代市川誠会長はじめ吉岡会長、元木会長が引き継ぎ日中友好の発展のため今日まで取り組んできました。

2009年12月23日には、南京大虐殺記念館に「反

覇権・日中不再戦の誓い」の祈念碑を建立しました。

90年代に入って中国経済の発展はめざましいものがあり、日本経済を追い越す勢いで成長しています。このように、70年代の中国革命に学ぶ時代が終わり、経済発展著しい中国からは、労働者の置かれた状況変化に対応するため、確かな情報を発信することが求められています。私たち日中労交も以上の情勢認識にたち、次世代に何を伝え、歴史を引き継いでいくのかを議論し、現在の中国を取りまく様々な情報の中で、とくに労働者に関する情報を発信するH・Pの開設、会報の発行、会員拡大に取り組む所存です。

従前の日中労交の名称を継承しながら、新しい中国に対応する情報発信の会に変化発展させていきます。

私たちは、北京・南京・杭州・上海を6日間という期間で訪問し、日中労働者の友好が深まり、両国人民の交流が発展することを祈念して訪中団を代表しての挨拶とします。

- 1、団員名簿
- 2、訪問日程と概要
- 3、各団員の感想、を掲載する



- 団 長** 垣沼 陽輔  
日中労交副会長  
全日建運輸連帯労組近畿地本委員長
- 副団長** 前田 裕晤  
日中労交事務局次長  
労働情報代表
- 秘書長** 前川 武志  
日中労交事務局長  
元大阪総評東南地区評議長代行
- 団 員** 亀谷 保夫  
日中労交理事  
東北全労協議長
- 団 員** 長尾 伸夫  
日中労交理事  
全港湾四国地本委員長
- 団 員** 大野 進  
日中労交理事  
全港湾大阪支部委員長
- 団 員** 上田 孝二  
日中労交大阪支部  
大阪全労協副議長



**1、 訪問日程と概要**

**7月17日** 北京空港到着後ホテルチェックイン  
中華総工会歓迎宴

出席者  
総工会 江 広平 書記処書記  
王 明然 国際連絡部亜細亜太平洋洲処長  
邱 麗珍 同 同 副処長  
日本側 団員7名

**江 広平 歓迎挨拶**

本年は中日国交正常化40周年に当たります。その節目の年に中国を訪問されましたことに歓迎の意を表明します。貴日中労働者交流協会は正常化前より活動され国交正常化に努力されました。そして今日まで活動されてきたことに、敬意を表します。

中華全国総工会は企業と経済活動の発展を通じて労働者の利益擁護となるように活動しております。今回の訪中を通じて、両組織の関係が末永く続くことを願っております。

**垣沼 陽輔 団長 挨拶**

私たち、日中労働者交流協会（略・日中労交）は、日中国交回復40年という記念すべき節目の年に、中華全国総工会の招待で中国を訪問することになりました。心より感謝申し上げます。

さて、私たち日中労交は、80年代に総評が解散し日本の労働者・労働組合が中国との友好・親善を深めることが困難になっていたとき、団体加盟から個人加盟の会員を募集し日中労交の活動を補強し、初代市川誠会長はじめ吉岡会長、元木会長が引き継ぎ日中友好の発展のため今日まで取り組んできました。

2009年12月23日には、南京大虐殺記念館に「反覇権・日中不再戦の誓い」の祈念碑を建立しました。

90年代に入って中国経済の発展はめざましいものがあり、日本経済を追い越す勢いで成長しています。このように、70年代の中国革命に学ぶ時代が終わり、経済発展著しい中国からは、労働者の置かれた状況変化に対応するため、確かな情報を発信することが求められています。私たち日中労交も以上の情勢認識にたち、次世代に何を伝え、歴史を引き継いでいくのかを議論し、現在の中国を取りまく様々な情報の中で、とくに労働者に関する情報を発信するH・Pの開設、会報の発行、会員拡大に取り組む所存です。

従前の日中労交の名称を継承しながら、新しい中国に対応する情報発信の会に変化発展させていきます。

私たちは、北京・南京・杭州・上海を6日間という期間で訪問し、日中労働者の友好が深まり、両国人民の交流が発展することを祈念して訪中団を代表しての挨拶とします。

※農民工問題、全労協との交流の在り方について質問と応答あり。



7月18日 国際交流協会 表敬訪問

劉 凱陽 副秘書長

王 琳 亜非大洋洲副処長

**歓迎あいさつ 劉 凱陽 副秘書長**

中華全国総工会の招待で中国を訪問されたこと、心から歓迎します。

中国国際交流協会は1981年に創立し、31年の歴史があります。この間に民間団体の一つとして民間交流を行い、他国との相互理解を進めています。

特に日本との交流について重視している。一衣帯水、両国の関係は間に溝があるもののその溝は狭い。両国の関係を良好に築くことは世界平和に寄与すると考えている。政治・文化の面で民間友好を展開してまいりたい。

中日の友好関係は40周年を迎え、本年は両国の友好記念年でもある。私どもは一般国民の間における友好を重視し、広島神楽の一行を招いて公演を行った。このことを通じて、両国の理解が深まり、信頼関係が増進するのではないかと期待している。本日は、多くの皆様が私たちの先輩と交流を図り、友好の礎をつくってきた人であると考えております。今後とも両国関係の発展のために頑張ってくださいことを祈念しております。

**垣沼 陽輔 団長 あいさつ**

私たち、日中労働者交流協会（略・日中労交）は、日中国交回復40年という記念すべき節目の年に、中華全国総工会の招待で中国を訪問することになりました。心より感謝申し上げます。

さて、私たち日中労交は、80年代に総評が解散し日本の労働者・労働組合が中国との友好・親善を深めることが困難になっていたとき、団体加盟から個人加盟の会員を募集し日中労交の活動を補強し、初代市川誠会長はじめ吉岡会長、元木会長が引き継ぎ日中友好の発展のため今日まで取り組んできました。

特に過去の戦争犯罪の反省を通じて、両国の関係が友好的に進められ、東アジアの安定に寄与することを願ってきました。旧日本軍が中国に投棄した毒ガスは、今も中国人民に害を及ぼしておりますが、その解決を日本政府に求める活動などを進めることや今回南京を訪問しますが江東

門大虐殺記念館との交流を進めてきました。

一昨年はその活動と日中労交の先達、市川誠先生、吉岡徳治先生の元会長や両会長を長らく支えてこられた平坂春雄元事務局長の足跡を南京の地に「反覇権・日中不再戦の誓いの碑」として残すことができました。その際の総工会のご協力に感謝します。

90年代に入って中国経済の発展はめざましいものがあり、日本経済を追い越す勢いで成長しています。このように、70年代の中国革命に学ぶ時代が終わり、経済発展著しい中国からは、労働者の置かれた状況変化に対応するため、確かな情報を発信することが求められています。私たち日中労交も以上の情勢認識にたち、次世代に何を伝え、歴史を引き継いでいくのかを議論し、現在の中国を取りまく様々な情報の中で、とくに労働者に関する情報を発信するH・Pの開設、会報の発行、会員拡大に取り組む所存です。

従前の日中労交の名称を継承しながら、新しい中国に対応する情報発信の会に変化発展させていきます。

私たちは、北京・南京・杭州・上海を6日間という期間で訪問し、日中労働者の友好が深まり、両国人民の交流が発展することを祈念して訪中団を代表しての挨拶とします。



7月19日 江蘇省総工会歓迎宴

江蘇省総工会 副主席 王 兆喜

江蘇省総工会 国際連絡部 部長 繆 建華

江蘇省総工会 国際連絡部 副部長 羅 慶霞

江蘇省総工会 国際連絡部 日本科長 盛 卯弟

**歓迎あいさつ 王 兆喜副主席**

中日国交正常化40周年を記念して中国を訪問された皆様を熱烈に歓迎します。本当に暑い毎日です。江蘇省は面積は省の中でも小さい方です。面積は中国の5%です。しかし、GDPは国内の20%で中国の発展を支えています。日本からの企業進出も多数あります。

この富をどう分配するか、が課題となっています。私も企業に働きかけ、労働者の利益を擁護する活動を行っております。

垣沼 陽輔 団長 あいさつ 総工会挨拶と同趣旨



7月20日 侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館訪問

副館長 陳 俊峰

まず、貴日中労働者交流協会が、南京虐殺事件に対する取り組みや当館に対するご理解をいただいていることに感謝します。館長の朱成山が応対すべきところですが、天津へ出張中ですので、代わって私から挨拶をいたします。貴交流協会は1985年8月の開館式に当館に遇難者への鎮魂の時計を送っていただきました。そして、一昨年には反覇権・日中不再戦の記念碑を建立していただきました。

このような平和を祈念する活動はアジアの安定に期するものと考えております。名古屋の河村市長のように隅難者が30万人でないから虐殺はないとかという歴史の真実を曲げるような行動は両国の相互理解を阻害するものである。皆様が行ってこられた活動と努力を中国人民も理解しています。

労交の皆様は、大先輩ですが若者が真実を知るように、若い人たちの訪問を歓迎したいと思います。ぜひ若者の訪問団を組織してください。記念碑の事も承っていますが、現場を見ていただいて話し合しましょう。

垣沼 陽輔 団長 あいさつ

一昨年私どもの元会長市川誠先生、前会長の吉岡徳次先生が気づいてこられた足跡をこの南京の地に残すことが出来ました。また記念碑についても銅の鑄造で作成いただいたことには満足しています。ただ、私どもは銅板を直接地面に置くのではなく、その間に石で土台を置くものと理解しております。市川先生が国交正常化前から国交回復の先達の役割をしてこられたこと、また当館の開館式よりかわりを持ってこられたこと等の経過が私たちの労交の大きな経過であると考えております。私どもの意をお汲み取りいただきたい。

その後、記念碑前で協議を行った。背面の市川、吉岡、平坂の銘が草で隠れて見えない事実をお互いに確認し、善処を要請した。副館長は館長に伝えることを確認した。



7月20日 浙江省総工会歓迎宴

浙江省総工会	副主席	吳 建先
浙江省総工会	国際連絡部 副部長	陸 佩軍
浙江省総工会	国際連絡部 通訳	刘 魯群

歓迎あいさつ 吳 建先 副主席

日中労働者交流協会の訪問団を心から歓迎します。皆様方は長い間両国の友好のために活動されてきたと伺っています。国交回復40周年も皆様の活動の成果ともいえます。

北京から南京を回って当地に来られ、お疲れでしょう。杭州は観光都市です。年に2800万人の観光客が訪れます。昔の農民はレストランやホテルを経営しており、地方から労働者が移入してきます。その問題が存在します。

垣沼 陽輔 団長 あいさつ

総工会挨拶と同趣旨



7月21日

上海市総工会	副主席	周 志軍
上海市総工会	国際連絡部 副部長	竺 敏 (じくびん)
上海市総工会	国際連絡部 通訳	崔 春吉

歓迎あいさつ 周 志軍 副主席

日中労働者交流協会の皆様 こんにちは、皆様は活動の大ベテランであり、日中両国の友好活動を進められてきた方だとお聞きしています。上海市総工会を代表して心からの歓迎の意を表します。上海市は省クラスの人民政府の中で、一番大きい経済と人口の地域です。逆に面積は一番小さいです北京市の半分もない。浦東新区が象徴するように、かつては畑ばかりで誰も行きたがらなかった地区が今ではビルの立ち並ぶ一大金融センターの街になっています。

1992年以降上海市の経済は16年連続で二けた成長を続けてきました。今新しい段階を迎え構造調整を図っています。品質を高め、合理的発展を目指すことです。2020年までに4つの目標を設定しています。①経済改革②貿易改革③金融改革④運輸改革です。

労働組合は、1925年5月に初めて結成され、それ以降の80年以上の間に組合員が830万人になりました。人口が2400万人ですからかなりの割合になると思います。

上海市総工会は全国総工会の指導の下、①労働者の組織

化、②賃金の団体交渉、労働協約を結ぶことを仕事として  
います。また、友好都市の大阪、横浜の労働者との交流を  
通じて相互理解を促進する活動も行っています。

垣沼 陽輔 団長 あいさつ

総工会挨拶と同趣旨



青年労働者の交流が渴望

国労 上田孝二

日中労働者交流協会の訪中団として、はじめて参加させ  
ていただき意義深い経験と交流ができました。そして中日  
国交正常化 40 周年の記念すべき節目の年に訪中できたこ  
とに感謝しています。

長い歴史の中で、日中の労働者同士が交流を深め、諸先  
輩方が国交正常化の取り組できた努力と大きな成果にた  
いへん感銘をいたしました。私たちは、アジアの一員とし  
て中国と日本との歴史を学びアジアの平和と安定を築い  
て行かなければなりません。そのためにも、南京大虐殺記  
念館など日本の戦争犯罪を多くの人が見て、反戦への闘い  
を取り組んでいかなければなりません。今回の訪中団は 60  
歳を超える人が多く、中国各地の総工会は若いメンバーに  
変わりつつあり、これからは、もっと若い労働者の交流が  
できるようにしていかなければならないと思います。

中国の経済発展は、日本のバブル期を越す勢いですさま  
しい発展をしています。私は、1982 年 7 月、北朝鮮訪朝  
から帰りに、北京市内に二日ほど滞在し市内を見学したの  
ですがあれから 30 年ですが、高層ビルラッシュそして人  
民の服装、歩く姿が変わったような気がします。そして、  
高層マンションが建ち並び家賃もどんどん上がっていく  
ようです。上海では、数年前までは畑で、今は百数階の高  
層ビル、日本の森ビルが一番高いらしいですがいま建設中  
のビルがすぐ追い越すらしいです。これだけ発展してどう  
なるのか心配ですが、さすが中国 13 億の人口、土地はす  
べて国、まだまだ発展していくのでしょう。

今回、南京から杭州約 3 時間と杭州から上海 50 分の移  
動で新幹線乗る機会がありました。事故がありましたから  
少々心配でしたが、停車駅ごとに停止位置に止まるか確認

をしましたがしっかりと止まっていたので安心しまし  
た。事故以来、速度 350 キロから 300 キロで運転していま  
す。最初から 350 キロ運転は早かったのではと反省もして  
いました。車両はドイツ、フランス、カナダ、日本の車両  
があります。今回ドイツと日本車両にりましたが大変安  
定運転をしていました。聞くと国土が広く直線が多いよう  
です。また、ホームがやたら多く 20 ホーム位あり、なぜ  
こんなに多いのかと聞くと、人口の違いだと一喝されまし  
た。これからも発展する中国でこれでも足りないとも話さ  
れていました。確かに、どこに行ってもすごい人すごい  
パワーでした。杭州の西湖はでは観光客が溢れ、上海では、  
上海タワーや発展した上海見学で地方からの観光客で人  
まみれでした。それだけ豊かになっていることのように  
です。

これだけ発展している中国、地方と都市生活、都市の発  
展による農民、労働者階級の格差などがちょっとと気がか  
り、確かに中国でも農民工が今後の課題になっているよう  
です。

それだけに、これからも日中の労働者の友好と交流が大切  
し、両国の友好親善が発展することを祈念します。

最後に、どこに行っても大歓迎で、毎夜、50 数度の白酒  
で何度も何度もカンパイ、フラフラ状態、中華料理もアヒ  
ルの舌から頭、食べたことのない品までいただき本当に美  
味でした。ホテルも広い部屋で大きなベット、一人どこに  
寝ようか迷いました。6 日間、本当に楽しく有意義な交流  
ができましたことを中国総工会の皆さんに心より感謝と  
お礼を申し上げます。



労働組合・労働者としての交流には疑問符

全港湾大阪支部 執行委員長 大野 進

私は、今回、二度目の訪中となります。前回は吉岡徳  
治会長と一緒にだったのですが、初訪中だったので、カル  
チャーショックを覚えました。また、掛軸を何本も買い  
込んでしまい、初日に小遣いをほとんど使い果たしてし  
まったこともほろ苦い思い出ですが、今回は、そんなこ  
とがないよう心がけました。

北京全国総工会には2億5千万人の組合員と共に、農民工という身分の労働者が多数所属しており、実数は幹部にも分からない様子でした。

南京虐殺記念館は、発掘現場で遺骨が並んでいた所をそのまま記念館として、広大な敷地があり、入場するために中国人が行列をなしていました。ここは、当時の日本軍の残虐さと戦争の悲惨さを後世に伝える重要な教育の場になっています。

1937年7月7日の南京城入場には、沖縄戦における最大の犯罪者だった牛島満の名前もあり、こうした特定の人物が、戦火を拡大したと思えてなりません。日本軍は、100人以上の中国人の首をはねたなどと競ったというのだから、信じられない思いです。展示されている虐殺の道具を見ると、まるで犬や猫を殺すのと同じように中国人を殺したのだと想像できます。こうした展示物などを見たとき、同じ日本人として、面（おもて）を上げることができませんでした。大阪で同じ日に「南京大虐殺60年」を反省する集会が行われたことが、せめてもの救いという気持ちでした。しかし一方で、いまだに「南京虐殺はなかった」などとの妄言を吐く輩がのさばる日本という国は、一体、どうなっているのかと思います。

3日目は、南京から、まったく振動のない中国版新幹線で杭州に向かいました。杭州駅に着くと、農民工と思われる多くの人たちが階段に坐り込んでいて、扇風機を抱え、夫婦子ども連れで仕事や住宅のあっせんを待っている姿は、経済発展の陰の部分を見せつけられた思いで、正視に耐えられませんでした。

杭州や西湖周辺の寺や石仏には2千年～4千年の歴史があり、観光客の数は、年間、2千数百万人にのぼるそうです。

上海総工会との懇談会では、人口2400万人のうち組合員は830万人ということでしたが、外灘のテレビ塔見学の際も、大勢の行列を片目に、特別にエレベーターで上まで上がりましたが、少し気が引けました。訪問団を、どこに行っても「特別扱い」する中華総工会のやり方は「国家権力」を感じ、内心、反発を覚えました。

全港湾とは20年以上の親交がある中華総工会の王明然氏が北京から上海まで同行され、交流・親睦がはか

られました。

外国企業の中国進出に際し、組合加入を条件に企業誘致が行われています。しかし、労働者としての階級的意識が全くない中で、多額の組合費によって総工会が栄えることについては、理解に苦しみます。また、“企業が栄えて労働者が潤う”という考え方を聞いたとき、前田裕晤さんは激怒しましたが、よくわかります。

日中労交としては、中華総工会から今回が最後と告げられたため、今後の交流はなくなりますが、これほど考え方に相違がある現状では、労働組合としての交流にはならないと思います。



## 日中両国の平和とアジア全体の共生を

全港湾四国地本委員長 長尾伸夫

日中労交メンバーとしての中国訪問は、1999年以来の2回目です。1回目は故吉岡さんを団長として、秘書長が平坂さんという最強メンバーの中で、若手として初めての訪中でありました。13年後の今回は、団長の垣沼さんが私より3歳も若いということで感慨もひとしおです。最初の訪中からこの13年間は、私の人生も大きな変貌がありました。全港湾の一組合員から四国地本の専従役員となり、まだ若手の面影の残る40歳代から白髪と皺の目立つ60歳を越した顔に変貌しました。同様に中国も13年間の変貌を遂げたことを体で実感した旅でありました。

自転車の大集団が、電動バイクへと替わり、各都市には高層ビルが林立する近代的な国となっていたのです。南京から杭州、杭州から上海までの高速鉄道（中国新幹線）は、揺れがほとんど感じられない立派なものでした。つい最近大きな事故を起こした高速鉄道の印象に代表されるように、百聞は一見に如かずという諺そのものでありました。

訪中前には最近の中国の国際社会における動向は、多少行きすぎではないかという思いがありました。両国の間の溝が深まりつつあるという印象もありました。労働組合の役員という立場でありながら、テレビや新聞などが洪水のように流す情報に晒されていると、知らず知らずと偏った考えが醸成されていたようです。

国際交流協会の劉副秘書長が挨拶で述べられた「両国の関係を良好に築くことが世界平和に寄与する」という言葉が身に染みる思いです。また、それぞれの各都市で通訳をしていただいた方の率直で誠実かつ精力的な人柄にも感心したところであり、人は付き合ってみないと分からない、そして国通しの関係も同様であるということを実感しました。

中国に対して否定的な報道の多い日本のマスコミが、北京オリンピック後にバブルがはじけるという報道を盛んに流していました。しかし、各都市の名所を案内していただいた折に、観光に来ている中国の民衆の方々の圧倒的なエネルギーを目の当たりにすると、まだまだ力強い経済発展が実感されました。

民主党政権の発足当初は、日本は中国を中心としたアジア諸国とともに歩むということを表明し、これからアジアの新たな平和が築かれることと大いに期待をしたものです。しかし、現在はごらんの通りであり、自民政権時代よりさらにアメリカ追従の国へと後退した状況です。

私たち日中労交のメンバーは、様々な雑音にとらわれることなく冷静な目を持ち、日中両国の平和とアジア全体の共生を求め、活動していくことを誓った旅となりました。



日中労交幹部訪中の旅を終えて

訪中団副団長 前田裕晤

日中国交回復40周年を記念して、中華全国総工会の招待を受けての訪中が実現したものである。それに至る前提として全国総工会は交流のあり方として、各国のナショナルセンターとの交流を基本とする方針と成った為、日中交流協会との関係の整理も含めての招待の性格を持っていた。日中労交の国交回復以前からの交流経過からすれば納得し難い側面もあったが、中国側の体制整備と交流方針の立て方である以上、その立場を了承し、初代会長の故市川誠、次代会長の故吉岡徳次と、長年事務局長を担った平坂春雄の偉大な先人の交流足跡が南京大屠殺記念館庭に石碑建立を果たした事の確認を含めての役割もあつての訪中団と位置づけていた。

7月17日、北京空港には全国総工会国際部アジア太平洋

処処長の王明然氏の出迎えを受け、以後22日上海空港より帰国便に乗るまで随行責任者として同行して頂いた事に感謝したい。

北京での全国総工会の招宴での江平書記処書記の歓迎挨拶には末尾に「今回の訪中を通じて両組織の関係が末永く続くことを願っております」との表明があり、以後の江蘇省・浙江省・上海市各地での交流でも手厚い歓迎と挨拶を受け、感謝しながらも交流のあり方についての変更の有無について戸惑ったのも事実である。

各地方・産別の交流は中央とは別物として実施する方向は承知していた。王明然氏との今後のナショナルセンターとの交流方針では我が国とは「連合」「全労連」であり、「全労協」からは交流の申込みは無いから、文書での申し入れが欲しいとの依頼された。

全労協との関係については、今回の訪中に当たって事前に事務局に総会の意向を伝えており、対応と表明を依頼する予定である。

南京大屠殺記念館での記念石碑については土台石が設置されてなく、副館長に建設経緯を説明し、予定通りの土台石の設置を要請したところであるが、何故、私どもが拘るかと言えば、日中交流に献身的に努力してきた先人三方の足跡を残したかつたからであり、今後、南京を訪れる日本人に、日中交流の歴史を知る一助になると信じたからである。

最後に私的な想いとしては、一日を西湖の周遊をさせて貰った事に感謝している。「西湖に遊ぶ」を詩に託した古人の想いが伝わった

一日であり、旧来の会議と討論の行程だけではない趣に、謝・謝！

参考資料

中華全国総工会と全労協との交流問題について

全労協・金沢議長殿

2012年8月17日

日中労働者交流協会事務局次長

大阪全労協顧問 前田裕悟

今回、国交回復40年記念を兼ねて全国総工会の招待により、日中労交は7名の代表団で訪中してきました。団長は全日建、副団長は小生、団員として東北全労協事務局長亀谷、大阪全労協副議長上田が入り、他は全港湾で構成されています。

全国総工会は、交流のあり方として各国のナショナルセンターと行う方針となり、日中労交とはこれが最後として、過去の経緯より敬意を表しての招待となったようです。日中労交は初代会長故市川誠、次代会長故吉岡徳次の両氏は労研センター創始メンバーであり、全労協の発足に努力された経緯があります。

又、全労協山崎議長は総工会と共に北朝鮮への物資援助を朝鮮職業総同盟に行った経緯もあり、傘下各単産・地域交流の実績がありました。

今回の訪中で、総工会国際部アジア太平洋州処長との間で、日本との交流先の質問をしたところ「連合と全労連が該当」の応えがあり、小生より「全労協」はどうするのかと再質問したところ「全労協からは正式に文書も要請も頂いていない、出来たら正式な申し入れが欲しい」との回答がありました。

中国の現状を見るときに様々な評価はあると思いますが、その上でも如何にするかは全労協として判断して対応されるよう要請します。

私ども日中労交の立場からすると、今回が最後と判断していたのですが、北京で総工会招宴では書記処書記の挨拶では「今後共の交流を」の言があり、解釈に戸惑う一面もありましたが、まだ未整理なのかも知れませんが、全労協としての態度決定をお願いする次第です。

以上、日中労交訪中団としての討論経緯も含めて（詳細

は別途口頭で) 致しますので宜しく対処方要請します。  
以上

編集後記

日中労働情報フォーラムとして、助走期間です。本体の日中労交は7月に訪中団を派遣しました。3つの課題を抱えた訪中です。2つは前田報告に記載されているとおりです。

3つ目について、今後の日中労働者連帯に向けて、どのような理論枠組みを形成していくのかが問われています。

農民工問題は、中国経済の繁栄の陰の問題です。繁栄による格差拡大にどのように中国が対処するのか。

また、日本の非正規問題と共通するとこと、相違するところを明らかにしていきたいと思います。

また、8月後半以降尖閣列島（魚釣島）をめぐる熱い議論が生成してまいりました。領土問題としてとらえれば、互いに譲る道はないでしょう。ついに、9月16日の報道によれば、中国のデモ隊の中には武力解決すら主張し始めている。

この問題を資源問題、経済問題として、とらえれば、尖閣の経済利権と現在の両国における経済を天秤にかけつつ議論をすれば、熱い話にはならないと考える。

中国製品の重要部品には日本製品又は日本の特許が使用されている。（たとえば、エアコンのコンプレッサーはダイキン製である）コンピューターは日本ブランドであってもその部品は中国製である。もし、戦争になったと仮定して、両国の経済は破滅する。喧嘩は手を上げることはたやすいが、その納め時こそ難しい。取り返しのつくうちに収めどころを模索すべきである。

そうした中で、労働者階級は国境を越えた団結を保つことが出来るのであろうか。

私は団結はできると考える。しかし、楽な道ではない。

この情報フォーラムが早く軌道に乗ることを希望する。

前川 武志